

# 針葉樹会報

復刊第50号



1977.8

## 表紙の写真説明

二上山は大和と河内の東西の境界、生駒山系の南端に近い金剛山系の北端にある。松本清張が「大和の前方後円墳はこの山をモデルとして構築された」との説を発表し、注目を浴びた。二つの峰は雄岳(540m)と雌岳(474m)と呼ばれている。昨年12月友人と二人で桜井線大和高田駅から当麻寺を見物し、近畿最古の街道と言われる竹内街道を歩き、峠を越えて河内太子町へと向かった。峠から右へ登れば大津皇子の墓がある二上山の頂上は近い。

(加藤正己)

## 表紙の写真説明

会務報告	白馬主稜行	五竜岳から剣岳へ	K2を目指して	小谷部、森川両氏の年忌に憶う	吉沢一郎
西牟田伸一	佐藤 金子	佐藤 松田	船本	吉沢	一郎
	之敏 晴彦	活郎 重明	文治		
:	:	:	:	:	:
	18 16 15 12 7 7 2 1				

## K 2 を 目 指 し て

吉沢一郎

それこそ、山のものとも海のものともわからなかつた日本K2登山隊というものが、いよいよ具体化して、五月九日のPIAで羽田を出ることになった。あと二日である。

準備万端整つてと言いたいところだが、私は今日に至るまで物を書かされたり、睡い思いでTVに引っ張り出されたり、インタビューに応じたりということで碌な仕事も出来ないうちに出発の日が迫つてしまつた。

計画進行中に大変な迂余曲折があり、一体K2隊はどこへ行くのやらと前途に希望の薄らぎかけたこともあつたが、兎に角頑張つてここまできた。

一九二二年に一橋山岳会の仲間と一緒に燕岳に登つた私の山登りが、遂にここまで来ることは予想もつかなかつた。運命だと言つてしまえばそれまでのことだが、振り返つてみれ

は最後まで苦労をした。それだけのことはきっとあるに違ひない、と私は信じている。  
尚、六月中には私の訳した「ヒラリー自伝」が草思社から出版される。私への応援の意味で、出来るだけ多くの人々に買つてもらえたと願つてゐる。(52・5・7記)

### 現役紹介

(氏名、学部、出身校等)

近藤泰(リーダー) 法4年、細谷ゼミ、

名古屋東海高校。外交官試験を目指していた為、半年程休部していたが、この夏山より復帰した。登攀意欲にあふれ、ヤル氣満々の下級生を引っ張つていく上ではうつてつけの存在。

神野隆(サブリーダー) 商3年、岩城

ゼミ、和歌山県立桐陰高校。キャンディーズの大ファン、情深き関西人の筆頭。合宿のメニューに茶がゆを入れるべきだと主張している。シルクロードに憧れている。

この予定通りに旨くいくか。われわれとしてはやるだけのことをやり、あとは天運に委せるより仕方がない。それにしても隊の全員

## 小谷部、森川両氏の年忌に憶う

(二)

船本文治

昭和十六年九月十日付、大井元芝町の小谷部氏より、大阪姉宅に腎臓炎加療中の

船本宛

「漸く秋氣がきして来ました。貴君永らく病氣御養生の由でしたが、其後如何ですか。

僕の方も何かと多事で、心ならずに御無沙汰して了いました。

この夏は是非共南アルプスへと、予而お話して居たのでしたが、駄目でしたね。

僕は八月末に一人で上高地に這入り、中尾峠を越して槍見温泉へ泊りました。それから

翌日、クリヤ谷の長い登りを笠ヶ岳頂上迄頑張つて、頂上小屋で寝ましたが、もう小屋番も居らず、僅かに残りの米と味噌のみで、久し振りに質素な昔の山旅を思ひ出しましたが、次の日は大変です。

先ず、笠頂上から、笠谷と言う飛弾の蒲田

んが、何とか好い山へ行き度いですね。今度は少し、アルバイトの寡い、プリミティブな方面へ参り度いと思つて居ります。

会社の方は、何日頃出ますか。此間社用で下阪しました。フロントピータ等々相変らずですね。せいぜい御加養の上一日も早く御本復を祈ります。勿々」

昭和十八年三月二十二日付、西八丁堀で街道迄出た処、高山行のバス最終が出て了つたので、上りバスで平湯へ行つた処、途中でガイドの大和由松に出逢つて、船津屋と言ふ宿屋へ案内され、それから飲めや歌へやの大騒ぎで、とうとう高山出張の××と沈没して了ひましたよ。

山の湯の、うすら寒い夜気を浴びつつ、宿

して居たのでしたが、駄目でしたね。

へ戻る情感には、何か甘酸いものがありました。貴君でも居たら、又「吹雪は止みて月は出でぬ……」朗々とやり出す事でしたらう。

た。貴君でも居たら、又「吹雪は止みて月は出でぬ……」朗々とやり出す事でしたらう。

心配して居た身体の調子が案外元氣な由、安心しました。併し、此の半ケ年位は、なれば病人の気になつて自重されたい。

かくて、次の日、今般のガソリン規制で最終となつたバスで、安房を越へ、中の湯から松本経由で帰京した次第で、仲々愉快な旅でした。

この冬は、国際情勢でどうなるか判りませ

りませう。

久保君の住所判らぬので、大兄より宣しくお伝へ下さい。」

昭和十八年三月二十八日付、鎌倉七里ヶ

浜で療養中の小谷部氏より、豊中船本宛。

「拝復、一別以来御無沙汰して失礼。又過日

はお便り貰ひばなしで、貴住所失念して失礼を重ねた次第御海容乞ふ。

貴兄の御健康心配してましたが、今や全く丈夫になられた由大慶至極です。酒と女には呉々も御注意されたし。

愚生の病気思つたよりも重症で、幾ら寝ても一向よくならず、悲観の態です。

旧暦來、表記湘南の地に敗慘の身を横たへて居ります。

森川は、時々遊びに来て呉れ、往年を偲び、共に髀肉之嘆に暮れて居ります。

この夏は、蓼科高原か上高地か、然るべき山間に暑を避けて療養する積りです。出来たら会ひたい。

会社の方は、辞職する積りだったが、まだ休職期間延長出来るらしいので、この秋頃迄軽快したら再出馬の積りです。

では不順の折、一層御自愛乞う。久保によろしく。床上乱筆失礼。」

昭和十八年四月十七日付、七里ヶ浜の小

谷部氏より豊中の船本宛、葉書

「拝啓 バター一封早速御恵送に預り、洵に

有難う。最近は当方、飯の量を殆ど半減されて、日頃大食の僕などは、フーフー言つて居るので、全くバター等は大助かりです。

もう大分春めいて、氣もそぞろのシーズンですが、一向はつきりしない病氣で、不快です。然し、体は十六貫許りに肥つて来たから、もう一息でせう。

夏には、出来たら上高地あたり迄もと思つて居ります。

てますが、如何なものでせうか。では又。」

昭和二十年六月七日付、房州茂原に疎開の森川氏より、結核のため郷里米沢に療養中の船本宛。

「春の便りの返事が、大分遅れました。初夏の氣候にて、野も山も緑、東京は焦土と化すとも、大自然はそのままです。大兄には漸く病勢好転の模様、大慶至極です。

不思議なもので、此の病氣、よくなり出す

と、相当の事をしても平氣で、「不安定期」に於ては些かの事でも発熱し、否絶対摂生を守つて居て、日課通りの生活でも、悪化する事があるので、自分の過去を考へても、全く不思議な程です。

但し、今の無理は一朝にして元の黙阿弥に返り、如何しても下らぬ頑固な微熱になります故、くれぐれも或る限度一此の限度が自分で分れば、既に此の病氣快復したとも云へると思ひますが、その限界を超えた範囲に自由に大氣を呼吸して下さい。繰返しますが、必ず手放しの樂觀大禁物です。「前車の覆轍にならぬ様」

さて、富士見の小谷部助さん、やはり一進

一退にて、戦局の前途、自己の立場等につき、種々頭を悩まして居る模様、何とも言葉のかけ様もありませぬ。仮に戦局が好転しても、彼の心境必ずしも、明朗とはゆかぬと思ひます。静かに心を定め、来るべき時を待つ心が欲しい。昔の助さんを思ふと、残念です。

同じ通信の中で、小生の善処を望んで来ましたが、小生此の冬以来、漸く本格的体力の

向上を自覚し、現在、祖国の難局と微力との均衡点を考慮の結果、此の村に於て、労力不足の為不耕作の止むなきに至った水田二町歩一三町歩の耕作を、茂原（近隣町名）農学校上級学徒の勤労奉仕隊の援助により、計画して居ります。

学校当局、村農業会と云はず、實際恩恵を蒙るべき村自身の無理解は元より、農具、作業衣、牛馬、学徒の食料、寝具、宿舎、肥料更には耕すべき土地そのものの選択、地代、地主との交渉等一つとして難問ならざるはなく、体力智力の限りを尽して来ました。



小谷部全助君  
昭和9年夏剣八峰にて  
(望月)

によると、近々此の辺り、老幼子女は強制立退を命ぜられ、山形、福島方面へ疎開になるやも知れぬ事、小生老母及び妹親児（一女）適当なる所へ、再び立

今は、漸く各方面の理解を得、当初の計画の三分の一に縮少し、些か時期遅れながら、先ず学校当局の全面的援助を獲得、曲りなりにも、計画は進行しております。小生宅も現在、学徒九名同宿、共に学び、共に耕すとゆかぬ迄も、往年の涸沢テント生活を思ひ出す様な生活です。

兎に角、此の二町なにがしかの田から、百俵のお米が生れ出れば、秋のお楽しみです。

田植が済む迄は多忙です。その頃、又詳しくお便りします。唯一言、此の頃の学徒の気風、規律を見ると、昔年の吾々自ら、恥しくなる位なものです。

話は別ですが、噂

によると、近々此の辺り、老幼子女は強制立退を命ぜられ、山形、福島方面へ疎

昭和二十年六月二十五日付、富士見高原  
小谷部氏より、米沢船本宛葉書。

「久し振りに元氣なお便り懐しく拝見、極く初期の内に病勢を喰ひ止め得た事、御同慶の至りです。今後は、過度の無理と栄養不足に注意すれば萬全でせう。森川からも、例の水田二丁歩の耕作の便りあり、喜んで居る所です。

処が、小生と来ては、既に在職中、手放せぬ仕事の為、とことん迄病氣を進行させて了つて居た為、年又年と、ヂリ貧的に悪化を自覚して居ります。

今年も、ずっと有熱状態で過ごして来ましたが、もう斯うなると、理想的なカロリー食なども全然摂れず、今更安静にした処でどうなるものかと言ふ訳で、残った体力で、時に

退かす必要あるかと考へ居ります。

小生は義勇隊に入つても残る考へながら、若し貴地に一間か二間で結構乍ら適當な貸家なり貸部屋なりあれば、斡旋お願ひしたく思ひ居ります。面倒乍ら、お願ひ迄。

うたた寝の襟足さむし梅雨曇 森川生」

菜園をいちつたり、鶏の世話などしたり、ヘボ碁を打つたりと言ふ生活です。

どうも小生には、病氣のせいか、貴兄のよ

うな建設的な樂観的な見方が出来ないのは淋しい話です。佐藤弘の經濟地理や世界資源分佈論などに大分影響されて居るのでせうかな。或は前職で資材調達に苦しんだせいか。兎に角吾が國体は如何なる事態にも軟論の余地は

なく、吾々も、最後迄やり抜くのみでせう。何れ、調子好い時に詳しくお便りします。

では、益々御自愛専一に。さようなら。

昭和二十年八月二十九日付、富士見小谷  
部氏より、食料豊富な農村に転居方を勧めた小生意見に対する返書

「残暑厳しい折、お変りなきや。先日は大詔

降下と入れ違いに貴信拝受、種々小生の現況改善の為御心配願つて、本当に有難く思つて居ます。

今後の降服で何もかも骨ぬきになつて了ひ、電灯はつく、疎開も不要等々、ガラリと状勢一転ですが、相も變らぬは食料事情ですね。

僕も恥を忍べば、可成り顔も利く事と思ひま

すが、僕のささやかなプライドが許さない訳です。兎に角、自分で自分の処理がつかぬ様では仕方がない。くだばる以外にないと言ふのが僕の立て前です。

東京の拙宅も些少な家作も、運よく全部災害を免れて、拙宅は姉一家に貸して、又家作の管理も頼んで、小生一人、こうやってのん

気に療養させて貰つて居る訳です。勿論小生

の本拠は、東京の拙宅にあります。兎に角、

この程度の生活なら、当分不安はないので、

せめて晴耕雨読程度にでも、体を使える様に

したいのが念願です。昔日の超張切時代を思ふと、死んで了ひたいと思ふこともあります

よ。況して、未見込のない弱小国と惰した日

本を考えると、消えて了ひたい気持になる事

がありますよ。茨木さんみたいに、好きな山

に消えやうなんて、真剣に考えた事も度々で

すが、色々な身辺の事情を思ふと、さう云う

訳にも行きませんね。何れ、交通でも楽にな

つたら、氣分転換に、何処か移らうかとも考

へて居ます。何しろ、今後の見通しがつかな

いので、当分は静観の外ないでせう。

兎に角、えらいことになつた。こう云ふ際

こそは、一層健康が欲しいですね。貴兄も大

いに御自愛下さい。では又。

多分難かしいと思ひますが、秋まきほうれん草の種子、若し入手可能でしたら一合位お送り願へませんか。』

昭和二十年九月八日付、茂原の森川氏より船本宛

「久し振りに御元気な手紙拝見、誠に嬉しく思ひます。

こちらも、何時か秋になり、虫の音が日毎耳に近くなります。

戦勢一変の事、それから耳にする眼にする事々に唯黙し、野辺に停立し、青い空を見つめるばかりです。

激しい感情と暗黒の苦痛に挾まれて自転する自己、余りに軽薄な騒々しい世相の動き、言葉が、これ程役に立たなくなつた事は珍し

い。併し、君の言はれる如く、昔のグルッペを固めて、其の中に、僅かに呼吸する場を見出さんとする事は、何より望ましい。新しい

針葉樹の芽が出かかるて居る芽を伸ばそう。

徒らに「竹林の七賢人」の消極ではなく、十

年後二十年後の日本の在り方を、確り頭に入

れて、苦難を分ち、忠告し、喜びを共にして、  
一步一步前進して行く様な團結をつくりたい  
と思つて居ます。

前線帰りの飛行機乗りから、改めて山の美  
しさ、氣高さを話されております。ヒマラヤ  
の山頂に日本の旗を立てる日を夢みた昔が懐  
かしい。併し、夢に終らせてはならないと、  
固く思います。

疎開家の事、全くお世話様でした。小谷部  
兄には、交通の便あれば、何れ訪ねてみる積  
りです。」

昭和二十年十一月二十二日付、富士見の  
小谷部氏より。

「拝復、御手紙拝誦、當方こそ御無沙汰、失  
敬しました。

お元気で何よりですね。当地は、毎日晴天  
勝ち、寒さはもう可成りで、降霜で真白です。  
妙な平和時代到来で、近頃、快々として樂  
しまずです。いつその事、爆弾で一思ひにや  
られて居た方が、サバサバしてよかつた様に

も思はれる此の頃の世情です。

実は不図したはづみで、昨十月初めに出し  
た九度の高熱が、どうしたことか一向に下降  
せず、些かあわてて、付添をつけたり、絶対  
安静を試みて居ますが、今以て降らず、九度  
内外がこれで五十余日欠かさず続く事になり  
床食ひ、床糞、全くの重態になつて了つた訳  
です。

最善はつくして居りますから、後は運命と  
云ふ處、何卒御心配なく。

再び回復出来たら、ゆっくりお便りします。  
勿々。」

助さんからの此の絶望的な手紙を貰つた私  
は、何ら為す術もなく、ただ役にも立たない  
激励の返書を送るとともに、秋の収穫も終つ  
てほつとしているだろう森川氏宛に、助さん  
の文をそのまま写して詳細を知らせた。

その後、両氏からの便りは途絶え、私は病  
床の傍の神棚に掌を合わせ、ひたすら助さん  
の加護を神に祈つていた。

歳の暮になつて、思いがけない森川氏御母  
堂様からの封書を拝受。しかも「富士見にて」

と書いてある。不審に思いながら封を切ると  
両氏の訃報であつた。

痛恨無念。何という悲しい運命であろう。  
ともに登り、ともに飲み遊んだ、私の僅かな  
登山譜の中で最も多く行をともにし、生命を  
ザイルにつないだ此の二人を、一時に喪うと  
は。呆然自失。私はそれから、ふたたび有熱  
状態に陥つた。

夜汽車の中で、いつもウイスキーをチビチ  
ビとやり交した助さん、焦げ茶のうすぎたな  
い背広を改良した登山服を着て、いつも発車  
時刻間に「よう」とやつて来た森川氏。奥  
又白の雪洞に、森川氏と私が凍傷で閉じこも  
つていたときに、若し助さんが現われてくれ  
なかつたら、私の生命はどうなつていただろ  
う。助さんの病状の急迫を、若し私が森川氏  
に知らせなかつたら、森川氏はわざわざ富士  
見まで出かけなかつたのではないだろうか。  
いろんな想いが駆けめぐり、回想の糸は果て  
しなく伸びて止まるところを知らない。

年忌にあたつて、助さん、森川氏の冥福を

祈る。

(一九七六・一一・三)

のゴルジューは東谷山尾根にエスケープして、仙人ダムに下るというものだつたが、鹿島ウラ沢及びその右岸の尾根に関しては確かな情報が全くなく、少々の悪天候でも前半確実に歩けるかどうかが剣までの長町場の成否を決めるであろうとの判断から、最終案は次のよう決まった。遠見尾根→五竜岳→東谷山尾根→仙人ダム→雲切尾根→池平山→剣岳である。

留年して閑を持て余していた佐藤と私（松田）は、五月の連休には是非とも手応えのある山行をしたいと考えていた。具体的には、後立山の雪稜を登り、その後少し長い縦走でもと考えていたのである。そんな或る日、藤本氏から今回の計画を持ちかけられた。後立山から、下廊下へ下り、それから更に剣へ登りかえそういうのである。OBの立てたプランにそのまま乗るのは、いささかいさぎ良しとしない処もあつたが、何しろおもしろそうな計画なので、早速参加と決定した。藤本氏の当初の案では、赤岩尾根より鹿島槍へ登り、鹿島ウラ沢或いは、ウラ沢と東谷本谷の間の尾根を使って東谷へ一旦下る、東谷下部

のまま朝までグッスリと眠っていたようだ。あまり熟睡できなかつた佐藤と私は、さすがは社会人、日頃身を粉にして働いているせいであろうと、妙な処で感心した。

## 四月二九日 曇後吹雪

四月二八日、二三時四五分の夜行で新宿を発つ。隣りのボックスには、白馬主稜から朝日岳へ向う金子、前神両氏も居る。本来なら藤本氏は今回の計画などまつ先に前神氏をさう処なのだろうが、いかんせん前神氏は今連休は僅か三日間しか休みが取れないとの事。過日、連休の山の打ち合わせで、藤本氏、前神氏、佐藤、私の四名が会した折、藤本氏から今回の計画が出された時の、前神氏のいかにも残念そうな顔が忘れられぬ。

OB諸氏は一仕切差し入れの酒を飲みつつ楽しそうに騒いでおられたが、しばらくする間に残念そうな顔が忘れられぬ。

OB諸氏は一仕切差し入れの酒を飲みつつ楽しそうに騒いでおられたが、しばらくする間に残念そうな顔が忘れられぬ。

OB諸氏は一仕切差し入れの酒を飲みつつ楽しそうに騒いでおられたが、しばらくする間に残念そうな顔が忘れられぬ。

そのまま朝までグッスリと眠っていたようだ。あまり熟睡できなかつた佐藤と私は、さすがは社会人、日頃身を粉にして働いているせいであろうと、妙な処で感心した。

神城で白馬パーティと別れ、駅で身仕事を整え、テレキャビンへと向う。空は雲が低くたれこめていて、テレキャビンも半分から上はガスの中である。今山行には、二人用ツェルトしか持つてきていないので、天気が悪いと非常に不快なこととなる。それが頭にあるので、歩き出しの足は重かつた。テレキャビンを降りて、いよいよ遠見尾根を辿り始めるところ、時折ガスが切れ薄日がさしてきた。少し氣を取り直して、五竜へ向う登山者の列に混じり、黙々と登る。連休も始まつたばかりのせいか、思つたより人は少ないが、それでも遠見尾根はにぎやかな雰囲気に包まれている。それ程早いペースで歩いたつもりはなかったが、大遠見近くまで来た頃には、我々はその日遠見を登つているパーティの先頭に立っていた。丁度この頃より、一時良くなるか

にみえた天候が崩れだし、強い風とともに雪が降つてきた。急激に気温が下つたせいか、白岳の斜面はクラストしている。アイゼンが欲しい処だがそのまま登る。冬山のような吹雪の中、白岳の急斜面を登つてみると、間違えるはずのないルートだが、不安になつてくる。なかなかピークに着かないからだ。やつと白岳の頂へ着くと、西風は一層強くなつた。強風におおられながら、五竜小屋へと下る。小屋で一息ついてこれからどうするか思案する。本来なら、外でツェルトを張るべきなのだろうが、こうして小屋の中に入つてしまふと、もうそんな気は起らない。まずいことに、この五月の連休から北アルプスの大半の小屋は営業を始めているのだ。懷ぐあいと相談のあげく、小屋泊りと決定。素泊り、金二千四百円也。

デレキヤビン駅発八・四五一五竜小屋着一

三・四〇

#### 四月三〇日 快晴

今日の予定は、東谷山尾根の下降である。あまり人の入らない尾根であるし、地形も複

雑そうである。昨夜から皆、今日の晴れんことを祈つていたが、起きてみると正に五月晴れ。東谷山手前の池は雪に埋もれていたが、それらしき形は判つた。典型的な船窪地形である。東谷山から尾根は南西に方向を変える。この辺から雪が腐り始め、アイゼンが団子になつて歩きづらいことおびただしい。一九五竜への登りはほぼ夏道が出ていた。ピーク直下のコルへ上るトラヴァースで、先行パーティが苦労していたが、特にどうということもなく通過し、彼らを追い越す。五竜の頂に立つと、黒部の谷を隔てて剣が見えた。一

昨日の冬山合宿では、このピークではガスに包まれ、強風におおられながらツェルトにくるまつて震えていたことを思い出す。剣を見るどころではなかつた。今日見る剣は、陥しく大きく、そり立つてゐる。今山行ではあるまいに立たねばならない。かすかに緊張する。

剣をバッグに写真を撮つたりして少し休み、すぐ下降にかかる。下り始めは岩稜である。

夜の間に積つた新雪が、岩や這松を隠しておらずアイゼンでは歩きにくいが、陥しいといふほどではない。岩稜が尽き、雪稜となると、

今日のような快晴ではさすがに照り返しがつらい。東谷山手前の池は雪に埋もれていたが、それらしき形は判つた。典型的な船窪地形である。東谷山から尾根は南西に方向を変える。この辺から雪が腐り始め、アイゼンが団子になつて歩きづらいことおびただしい。一九〇〇メートル付近は尾根は細く切れ落ちており初めてザイルを出す。一ピッチ、スタッカット、二ピッチのアブザイレンで通過。尾根が再び西へ向きを変える辺りは、地図より実際はやせており、しかも尾根上は藪が出ている。時間を喰うううので、ここは一旦餓鬼谷側へ滑り降りて、一八二〇ピーク手前のコルへ登り返すことにしたが、正解であった。

この頃にはようやく東谷山尾根の長さを実感し始めた我々から、太陽はエネルギーをしぱり出す存在へと変化していた。雪がからまりついて重い足が、疲労の為なおさら重く感じられる。

一七七一・六メートルの三角点のある辺りはかなり地形が複雑で、ガスついたらルートファインディングがやつかない所だ。南西

にルートを取り、しばらく下ると樹林の間から仙人ダムが足下に見えて来た。まだ標高差は六、七百あるというのにどうなることやらと下っていくと、こんどは雪面が尽きて藪が出てきた。大分消耗している身に下りとはいえ藪漕ぎはつらい。幸い牛首尾根や対岸の雲切谷が良い目標にはなってくれるもの、藪の薄い方を求めて進む内に、東谷側の枝尾根に入つてしまつたりする。うんざりして、良い加減の所で、尾根をはずれて黒部側に降りてしまおうという話も出るが、やたらな所から下ると黒部の場合は行き詰つてしまう。正直にひたすら尾根を下つた。やがて前方に送電線の鉄塔が見えてきた。地図によれば尾根も末端に位置している。鉄塔を目指し懸命に下る。近付くにつれて、踏み跡が出てきた。それに元気付けられてなおも進むと、ポツと鉄塔の下に出た。荷を下すと皆その場に転がつてしまはらく話もしない。ようやく人心地ついたところで、明朝登る予定の雲切尾根を対岸に眺める。下部はスッパリと切れており、果して登れるものかどうか定かではない。仙

人谷から捲き込んではとも思うが、雪渓が切れており沢の状態もかんばしくはなさそうである。しかし全ては明朝のことと観察は早々に切り上げて、仙人ダムへと下つた。後から考えると、この時もう少しルートを丹念に観察しておくべきだった。鉄塔よりダムまでは道が通じている。

その夜は、ダムの管理人に頼み込んで、建物の蔭にツェルトを張らしてもらつた。落石よけの為である。

五竜小屋七・一五一五竜岳八・二〇一仙人ダム一八・〇〇

#### (松田記)

五月一日 快晴

今日は雲切尾根を経て、仙人池まで。下部の取付けが問題だが、とにかく仙人谷を渡らねばならぬ。これがなかなかの難事だった。氣楽に足をつっこんでジャブジャブという水量ではないからだ。黒部本流から少しつめた所でスノーブリッジを発見、アンザイレンシルは落ちるであろう。皆、恐怖を感じるようになったので、壁の上部でとうとうアンザイ

いていてとても渡れないと判明。そこで渡渉となつた。ザイルをフィックスしたものの水の流れは強く、腿から腰近くまでの渡渉に、転倒しそうになる。対岸の岩の上に濡れたものをひろげて、しばらく日光浴をした。

レンした。

正午頃ようやく立って歩くことができるようになり、雪面と藪が交互に現われる尾根に行程ははかどった。尾根は細く、両側は切れている。森林帯上限付近に脆い岩稜部分があり、ザイル三ピッチで抜けた。ここでさらに上部の雪面を熊がのそのそ歩いているのを見た。これから我々が通るべき所の近くだ。声をかけるときよんとしたようにこちらを見ていたが、やがて樹林の中に姿を消した。熊の居たあたりは、急な雪壁で、四足で爪があるとはいへ、よくもほいほい歩いていたものだと感心する。我々はアンザイレンして通過した。抜け出た所からは何の困難もなさそうな緩やかな雪稜が続いていた。懸念されていた部分が足下となつたため自然と皆、顔をほころばせる。それというのも、今夕からの天候悪化はほぼ確実であり、ツェルトでそれをやりすぐす破目におちいらないためには、仙人池への今日中必着という現実的要請があるからだ。二一七三ピークまでまだ六百近く登らねばならぬが、途中でバテてひっくりかえ

ることもあるまい。後は仙人池や池の平の小屋が雪に埋もれていないこと願うばかりだ。

尾根が直角に南へ向きを変えるあたりを過ぎ、南仙人山まで約二時間だった。頂に登りつくとすでに夕刻のやさしい風が頬をなぶつた。五竜はもうはるか彼方だ。眼前の剣の大きなマッスは、広がりつつある暗雲の下で、やや憂うつな感じがした。疲れた足を仙人池へ運ぶ。小屋は幸い二階の屋根が露出している。西からやってくる悪天のきざしにせかされるように、発掘にかかる。こういう時の藤本氏の卒先した活躍ぶりはなかなかのものだ。

仙人ダム七・一〇一緩やかな雪稜に出る一五・〇〇一仙人池一七・二〇

### 五月二日 風雨強し

予想通りの、都合の良い快適な停滞となる。夕刻、雨は小降りになり、夜には雲の切れ間から満月が出た。ラジオは、S字峠で登山者が黒部川に転落し、行方不明であることを伝えた。

### 五月三日 曇

天候待ちと称してゆっくりと出発する。剣

沢二股からの尾根の分岐で、剣沢方面かららしいパーティとはじめて会う。剣は上半は雲にかくれており、天気はどうもかんばしくない。池の平から池の平山への長々しい登りにかかる。池の平山頂に着くと、北方稜線を縦走してくる者、小窓尾根に取付く者等、登山者が雨後のだけのこの如く湧き出て、さすがに連休の賑いを見せる。しかしそれにしても、今このあたりにいる多数の登山者は、昨日のあの風雨をどこで耐えていたのであろう。

小窓への下りは、急だがステップがすでにあったので迷わず、這松とフィックス・ロープにすがつておつかなびつくり「窓」に降り立つ。さてここから小窓尾根の側壁を登つて小窓の王なる岩峰をまき、三ノ窓に出る訳だが、濃いガスの中ではひたすらステップを辿るのみ。しかし、視界があればこのあたりは足がすくむような所であることは、夏の思い出が教えてくれる。時折、霧の中から登山者の一団が現われては通り過ぎて行く。クライマー風のヘルメット姿が多い。

三ノ窓への下降は、堅雪の急斜面で、斐

ツクスもないでのザイルを使用。慎重に後向きになつて下つた。三ノ窓にはテントが五つぐらい。真白なチンネが、時々姿を見せていたが、誰も取付いてはいないようだ。我々は休むことなく、池ノ谷ガリ一をつめる。今日中に本峰を越えてしまおうと考えたからだ。長次郎のコルへあえぎあえぎ登りつき、雪稜を黙々と辿る。視界の制限された雪稜は奇妙に夢幻的だ。あいまいに乳白色になつた足下の空間は、気味悪いことこの上ない。

頂上に飛び出る。何も見えず、標識竹が一本風になびいているだけ……。それでも心は軽い。凍りついた鎖場を、次々に現われる雪壁を足まかせに下つて行く。高度を下げるにつれて、風はおさまり、薄い日光さえ射してきた。

突然、頭に血をにじませた包帯を巻いた人を、下山させている一団に出くわす。自分でなんとか歩いているところを見るとたいしたことはないらしいが、早月尾根といえども油断はできぬ。自戒のひとときだった。

行ける所まで行つておこうと、さながらベ

ースキャンプの観を呈する伝蔵小屋を過ぎ、石作りの避難小屋も過ぎて、気持の良い針葉樹林の雪の上にツェルトを張つた。大日連峰を望みながら、この五日間の山行を反芻してみる。雪、岩、藪、渡渉とちょっとぴり原始性の魅力。それは登山の面白さの原初的なものだろう。オーソドックスな山登りの充実感を再認識させられた気がした。

仙人池八・四五一池ノ平山一〇・三〇一剣本峰一四・五五一伝蔵小屋一六・三〇一避難小屋下一六・五五

### 五月四日 曇

佐藤周一 法3年、杉原ゼミ、都立墨田川高校。法学部首席入学者だが、えらの張った顔をみるととてもそろは思えない。パタゴニアに憧れている。

中西茂 経2年、大阪府立三国丘高校。高校時代は陸上部。泥くさく、しかしそれだけにたくましさは天下一品。現役一の酒好き。南アルプスを好む。

引地真 経済学部2年、和歌山県立桐陰高校、一橋祭ののど自慢で満場の喝采を浴びた。歌唱力と岩登りのセンスの良さは群を抜いている。一見して知的な雰囲気はあまりないが、趣味は競馬というから実質はそれほどでもない。米田篤裕（マネジャー） 経済学部2年、公立青山高校、昨年度の成績では、唯一一人Aの数2ケタを記録、信頼できるマネジャーである。大鵬と呼ばれるほど体格が良い。趣味は読書、スケッチ。

岡部寛之 社会学部2年、新潟県立長岡高校、本年ワングルより移籍した。山登りのセンスは非常に良い。岩登りに燃えている。人間の多い山はあまり好まない。スキーの達人。

出発七・一〇一馬場島九・三〇

（佐藤記）

## 白馬主稜行(一)

—金子晴彦—

毎日地下鉄に乗つて丸の内なんかに通つている身にとつて春夏秋冬、それぞれにそれらしい日々を十分に満喫するのはなかなかに難しいことだ。

今日は良い日になるだろう、通勤途上、横目でにらむ陽射しの工合、風の調子、それに空の色からふとそう思つても足はどんどん駅へと駆け込み、電車は走り、早晚そんなことは忘れて仕事に振り回されているのが一般である。

とりわけ強力な冷暖房の働く夏冬はひどい。夏だというのにびしりと背広を着込んで涼しい顔をしてみたり、冬だというのにワイシャツをまくり上げて大汗をかいたり、我知らず恐れを知らぬ背神行為に及んでいることも稀ではない。

かといつてこうした事態は生活の全てに徹底しているわけでもない。駅から我家迄の何という寒さ、そして暑さ、哀れ我季節は散々に分断され、何とも居心地悪く、往々にして、寒いなら寒い、暑いなら暑いではつきりしてくれないものかと氣をもまされることになる。

そして、運悪くこの思いが昂じた時、夏らしい夏、冬らしい冬に絶対会はなくてはならないとの強迫観念がくすぶり始める。つまり、

今でもナマの季節の保証されている山か海へと腰をあげなければならなくなるのだ。

出会いの機会が折良く設定出来れば幸である。しかし、それがかなわぬ時、これはもう愚にもつかぬ幻想に悩まされる禁断症状を呈することとなる。

正月山行に始まり、四ヶ月の間に前後三回出かけ、最早冬とは言えないこの連休によくトレース出来た白馬主稲行、これもきっとスベアと雪の下から声がする。タワシで雪を払い、這うようにしてもぐり込めばそこは人間も含めてありつけのものの散らかつた久方振りの母なる胎内である。「紅茶にしましょう」「有難い」スベアが勢い良く音をたてる。

冬だというのにラッセルひとつしていな等とぼやき始めた矢先、折良く「白馬主稲は某氏の年來の御目當」なる話を聞き及んだ。

某氏の年來の御目當である筈は無いし、某氏が登ろうとしている白馬岳には夏にさえ登つたことも無いのに、なら僕にだつて登れるかも知れない。それに某氏の熱い期待が寄せられていると思えばそれだけで親しみが持てるというものだ。

かくして76年暮、意氣盛んな前神、藤本両君に同行を願つて勇躍白馬へと出発した。

あたりが薄暗くなつた四時近く猿倉に着いた。朝八時に新宿をたつてもう雪の只中だ。先行の両君は山荘の左隣に幕営していた。サラグラーで使つたとかの天幕は激しい降雪に埋もれかかり、赤い筈の布地は雪にまみれて白く凍りついている。

「オーライ来たぞ」と声をかけると「ヤアヤア」と雪の下から声がする。タワシで雪を払い、這うようにしてもぐり込めばそこは人間も含めてありつけのものの散らかつた久方振りの母なる胎内である。「紅茶にしましょう」「有難い」スベアが勢い良く音をたてる。

「ところで主稲は見たか」僕が来る迄に先

行組は取付位迄は偵察しているものと思つてそう聞いた。大体、雪崩の危険のある長走沢取付の白馬尻の台地なんて言われてもんでもピンと来ない連中ばかりのパーティーだから何より偵察が肝腎なのだ。

「いや主稜の方へ行つておるトレースが全然無いし雪がものすごく深いんですよ」意欲十分である等の前神君はあつさりこう言つた。

これは、つまり主稜なんてとても駄目で、双

子屋根に転進しようということである。僕は一瞬ぐつとつまつた。こんな場合には「そんなお前」とでも言えれば一流である。しかし考える迄もなく、僕等は某氏の年来の御目当をまるで本でも借りるように一寸拝借してき

たパーティーにすぎない。開いた目次が難しいとなれば「さもありなん、主稜つてのは大変な所なんだ」なんて大仰に感心して肩をすくめて天をあおぐのは筋というか礼儀というものだろう。

かくて事態は急転直下、落ち着く所に落ち着き、第一次白馬主稜パーティーは猿倉に集合した途端、双子尾根パーティーへと変身する

こととなつた。冬に寝て雪をみながら酒を飲めばO.Bとしてはそれだけで上出来じゃあないか、というひらきなおりも手伝つてその夜は久方振り、のびのびと雪入りの水割を楽しんだ。

翌日は立派なトレースに導かれて小日向のコル迄上つた。天幕は三張しか無く、わずか離れた八方尾根のスキー場の喧騒からすれば寂しい限りだ。

明くる正月一日は冬らしい冬どころではない、むき出しの冬との鬪いに終始した。夜の間に天幕はすっかり埋まり、昨日確認した稜線上のラッセルは影もない。しかも八時近くに出発したというのにトップであるとは、本音としてはヤレヤレである。双子尾根も登れないのではないかとふと不安になるが、先ずは三人交代のラッセル開始である。

平らな所はまだしも、登りになると雪は上からのしかかつてくる。煙突でもあけるような工合に腕を振り回し先ずそれをかき落す。

途端に首迄もぐつてそこから抜け出すのに又々七転八倒することになる。

しばらくは無我夢中だ。しかしその内ラッセルのリズムなるものがつかめてくる。エツサ、ホイサと苦しい乍らも調子付く。ピッケルを振りかざして雪にぶつかってゆく一瞬、白く、冷たく、圧倒的に重い抵抗感が体をふるいたたせる。

「何でそんなことが好きなの、コーダローの読みすぎなの」いつか女の子に言われたことがある。しかし僕のウシロに道が出来る等という理屈っぽさよりはひたすら理不尽な猛々しさにけしかけられてとしか言いようがない。

どちら辺に来たのか見当もつかぬままに三匹チも進んだ頃、ようやく後続のパーティーがやって来た。男女合わせて十人位もいる。「交代しましよう」と声をかけてくれて大助かりだ。

ところが、吹雪にうたれて待つ段になるとそうしてやおら脚を踏み込む。十五分ともた楽してゐるのをいいことに、今度は何ともたたしているんだとラッセルの遅さに気をもみ

始める。数にまかせてどんどん交代するのも気にさわる。そして再び僕等の番が回つてくるとすごい対抗意識だ。先刻以上にピッチを早め、しかも長々と続ける。前神君なんかは体ごと雪を蹴散らす針ねずみになつたみたいだ。

その伝でどんどん進んでいると後のパーティから「もうそろそろ下つた方が良いでしょう」と声がかかつた。下るつたつて双子尾根を登つているのに何を寝呆けてるんだろうなんて思つて振り返ると、後のパーティはトレースから直角に左に折れてさつきと下り始めた。妙な方向へ行くなとは思うがルートに関しては全く自信が無いのだから黙つてついてゆくしかない。

下りとは言え体が余計に沈むのかなかなかはかどらない。それでもしばらくすると吹雪の合間に下の方に樺の木が見え、ようやくにして樺平のようである僕等はさすがと感心するばかりだ。しかし小日向のコルから一時間半の予定が五時間もたつてゐる。転進双子尾根も絶望だろうか。

ふと背後を仰ぎ見て愕然とした。今下つて来た稜線の上に三十人からの登山者がずらりと並んでいる。丘の上に突然現われたインディアンに肝をつぶしている騎兵隊の心境である。ややして事態は判明した。どうもトレースが出来るのをああして若干距離をおいて待つているらしい。ああ何ということか。

僕等は「よく見てろ」と言わんばかりに一層ラッセルに精を出した。最早リズムも何もあつたもんでは無い。無茶苦茶に雪を蹴散らし最低部にある樺の木の横をぬけ、やや行つて再び登りになるところで精魂尽き果てて大休止とした。但し後続のパーティが先に行

くものと考え終着駅のレールのように部厚い雪に突き刺つて終つてゐるトレースからわざわざ外れた雪の中に坐り込んだ。

途中、小日向のコルの天幕を撤収してその日の内に猿倉迄下つた。コルの直下の斜面では吹雪が正面から吹きつけ顔中が凍りついた。下り切つた雪原では危うく方向を見失いかけた。もう薄暗くなつた樹林に辿り着くと、慘敗にも拘わらず「すつごかつたなあ」と僕等は御機嫌だ。むき出しの自然には不安を覚えるものの、それも度を起すと、今度は陶酔を覚えるものようだ。

昼過ぎだというのにあたりは薄暗い。吹雪は激しさを増し、気温もぐつと下つた。

トレースを伸ばすパーティは現われない。テルモスの熱い紅茶をすりながら時折首を出してあたりの様子を伺う。どうも全登山者の今日の行動はここ迄で終つたようである。

吹雪にまかねがら整地をして幕営を急いでいるパーティの姿が樺平を陰鬱なものにしている。

こうなると悪天の兆しからして、あと二日で終る正月休み中の登頂は無理のようである。「どうしようこれで帰るか」「帰りましょう」主稜からの転進決定の時と同じく退散は誠に

あっさりと決まった。今日一日十分にやつたという満足感のせいか、もうここしばらくは伸びそうもないトレースの終着にいるという子供っぽい優越感のせいかはたまた歴然たる悪天の兆しのせいか、僕等に心残りというものはさっぱり無かつた。

以後十日間、白馬周辺は猛吹雪に明け暮れた。  
(続く)

## 会員消息

デュッセルドルフ

佐藤之敏

長いこと御無沙汰していました。(中略)

僕にはまだ恐らく昔の遠征だの、転職だとかいつた、生氣と不安に満ちた日々のほとばりが体のどこかに残っているようです。そして倉知さんのことと思うときは、特にそうした感覚が、7・8年の時間の経過を一足飛びに越えてもどつてきます。

前回いつ手紙を書いたか憶えていませんの

で、僕のこちらでの生活のどの辺りまでお知

らせしたか確かではありません。いざれにせよ、僕は目下ケルン大学の言語学研究所で比較言語学を勉強しています。決して楽な勉強ではありませんが、やはり自分の自然な興味に基くことだからでしょう、結構張り切っています。もとよりこの歳になつて、10

以上も若いドイツの学生と一緒にヨーロッパを基盤とする学問をやつしていくのに、どうしようもない大きなハンディキャップがあるのは充分承知ですが、ゆっくり腰を落ち着けてやつてゆきます。

鈴木英雄

（龍瓜山（一〇四一米）単独、静岡市北部の山。五十枚山（一七一九米）単独、安部川上流、関の沢から登り有束木に下る。三本槍、宮城、久保、大峠から三本槍、北温泉へ横断。ボタニスト宮城君に教えられる所もやろうかと考えています。

それとの関係と、東京と長野県しか知らない日本人の日本への郷愁からでしょうか、3年位したら、1~2年程日本に暮してみようかしらとも思っています。(これには、両親の晩年をそのそばで暮したいという気持もあるのです。) (後略)

(五一・一〇・一三 倉知敬氏宛)

黄昏雁坂小舎着、今日から冬期料金。先客一人、薪を運び濡れた物を吊してくれ大助かり。翌日は秋晴れの下、富士に見送られて甲武信へ。夜遙かに秩父の灯を望み、空にはオリオンが光る。熊さんの名句も遠くなりにけり。

柿原謙一

（秩父の御岳山、単独、浅間山がよく眺められた。）（鼻曲山、山田亮三、木村、柿

一九七六年山行記録

原息、河内、高橋、那須、後藤。山小屋につぐ山仲間の歓送山行。霧陵温泉で春時雨に遭う。 $\frac{3}{12}$  黒沢峠スキー行、山田亮三、柿原息。当世鹿島国際スキー場と称す。爺や鹿島槍が眺められた。 $\frac{4}{10}$  叶山・大福峠・赤久繩山、単独。秩父より上州に越え、下仁田へ抜けた。青学山岳部OBの平野氏一行につた。 $\frac{5}{2}$  立山スキー行、木村、柿原息、花井。大町エコノミスト村に待機してこの日室堂へ。雄山まで登つて一ノ越より滑る。若き日の夢がかなつたが……。 $\frac{6}{20}$  両神山、柿原息。白井差より往復。ホトトギスをきき梅新芽を賞である。 $\frac{6}{27}$  妙法ヶ岳、単独。久し振りに三峰の奥宮に登る。 $\frac{7}{3}$  野反湖より白砂山往復、山田亮三、柿原息。あまり感心できない山容。 $\frac{8}{4}$  イワカガミの花が美しい。山ダニに注意。 $\frac{8}{5}$  白山縦走を狙つたが雨で断念。御母衣ダムや白川村を廻つて帰る。 $\frac{9}{5}$  雲取山、下山のみ本田、真鍋両氏と同行。鎌仙人（富田治三郎）のレリーフ除幕式に参加。三条の湯に降る。古き山の湯。 $\frac{10}{10}$  清滝小屋より両神

山、単独。山頂のみ紅葉していた。 $\frac{10}{31}$  妙法ヶ岳より太陽寺へ、単独。本年の紅葉はどうもよろしくありませんと結論した。 $\frac{11}{21}$  秩父の御岳山、単独。村尾さん、藤島さんを偲ぶ道。 $\frac{12}{28}$  伊豆ヶ岳、山田亮三、小林茂雄。天目指峠に下る。 $\frac{13}{29}$  下栗より御池山、山田亮三、倉知敬、柿原息。深田さんの紀行にひかれて計画、下山して葉喰い。

### 望月達夫

一月、阿武隈（鎌倉岳、大滝根山、鶴石山）。真富士山。道志口峠、朝日山—巖道峠。二月、蕨山。顔振峠—越上山。高柄山。三月、鶴ヶ鳥屋山。三月、土坂峠—父不見山、赤久繩山。四月、山伏岳。能郷白山。五月、前黒法師岳。真眉岳、禿岳。田代山—帝釈山。六月、白山。七月、笠取山。八月、唐松岳—白馬岳—蓮華温泉。九月、鹿留山。十月、小又山。美女峠、吉尾峠。大烏山。十一月、浅間隱山、高間山。十二月、帶那山—弓張峠。鷹巣山。

### 岩崎利一

$\frac{1}{21}$  箱根湯本より湯坂道を登つて小涌谷へ出る。小春日や箱根湯坂は尾根の道。 $\frac{5}{30}$  し $\frac{5}{31}$  那

須温泉より三斗小舎で一泊、途中つづじが素晴しい。翌日は沼原に出て板室温泉の近くまでトラックに便乗。三斗小舎から沼原までの山道が美しい。 $\frac{6}{16}$  北海道旅行の途次、旭岳の中腹旭平に登つて雪の中につけられた道を歩き廻り、快晴の景観と高山植物の眺めを楽しんだ。 $\frac{7}{19}$  森吉山。流石に秋田の名山。ブナの原生林はまことに美観。しかも附近は湿原に恵まれて居り足の疲れを癒すのに最適。霧の頂上でキスゲの黄色い花がゆれていたのが印象的だった。 $\frac{7}{29}$  富士山。初めて夏の富士山の小舎泊りをした。非常に沢山の人とすれちがう意味で、良い経験になる山登りだと思った。 $\frac{8}{30}$  石割山。山中湖畔よりすぐ登れる静かな山。石割神社の巨岩が見事。つづじの頃も美しいことだろう。富士白し空より青き山中湖。

### 宮城恭一

$\frac{1}{17}$  不老山、単独、正月に不老山は縁起が良いと思つた。途中誰にも出会わず。 $\frac{3}{7}$  御岳（多摩）久保他一名。 $\frac{3}{19}$  し $\frac{3}{21}$  乗鞍岳、久保、甘利。陣場より高尾、単独、キブシの黄色い

花が印象的。 $\frac{1}{2}$ 丹沢表尾根、単独、ヤビツより登り、塔ヶ岳から馬鹿尾根を下る。かなりのアルバイト。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 黒金山、鈴木、久保。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 那須、鈴木、久保。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 道志から菰釣山、久保、道志温泉に一泊し、日石峠より大群山へ行くつもりが、便乗したトラックから下された沢をつめると城ヶ尾峠の近くに出てしまい、菰釣山を縦走する。ギンリョウ草（ユウレイタケ）を初めてみる。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 諏訪山、鈴木、久保、高崎の中村氏に車をわざらわし浜平に入る。誰にも出会わず宿の湯が良し。宿の庭に咲いていたベンケイ草を貰つてきた。根はなくとも葉っぱから新しい芽がでている。 $\frac{1}{2}$ 越沢、久保、奥多摩御岳山で沢登り。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 朝日連峰、単独、31日の夜行で山形へ。オリンピックの中継放送を聞きながら鳥原小舎へ、翌日は小朝日一大朝日一朝日鉱泉泊、曇天で見晴らし悪く午後より雨となる。

$\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 三国峠一平標山一谷川岳、久保。 $\frac{1}{2}$ 黒川鶏冠山、単独、落合の手前から登り、丸川峠から裂石へ。まつむし草が美しい。 $\frac{1}{2}$ 奥多摩浅間尾根、久保。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 奥鬼怒、久保、加

仁湯の露天風呂が印象的。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 安達太良、一水会10人、 $\frac{1}{2}$ 川苔山、久保、頂上で小雪がまう。 $\frac{1}{2}$ 不老山、単独、正月に登ったのでしめくくる気持で登る。ここから見る富士山は素晴しい。正月には小山へ下つたので今回は浅瀬へ下る。

### 久保孝一郎

$\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 西穂独標他、K氏。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 八方黒菱、J A C、懇親スキー。 $\frac{1}{2}$ 中国地方山地、単独。 $\frac{1}{2}$ 大山、単独、頂上積雪50~60 cm。 $\frac{1}{2}$ きびがら山、単独、雪が多く、スキーを持って行くべし。 $\frac{1}{2}$ 大山三峰、単独。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 三斗小舎、K氏、Y氏、隠居倉往復。 $\frac{1}{2}$ 日ノ出山、宮城他一名、吉野梅郷三分咲き。 $\frac{1}{2}$ 物見峠、他一名。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 乗鞍スキー、宮城、吉利。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 韓国岳他、他一名、えびの高原より往復、西都原古墳群。牧水博物館良し。 $\frac{1}{2}$ 大山、単独、雪、寒し、膝を痛める、以後母の死もあり一ヶ月休山。 $\frac{1}{2}$ 大山、単独、足ならし。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 黒金山附近、鈴木、宮城。 $\frac{1}{2}$ 景信山、単独。

鷹ノ巣山、単独。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 石諏訪山、鈴木、宮城。 $\frac{1}{2}$ 越沢、宮城。 $\frac{1}{2}$ 水根沢、他2名、ザイル使いそめ。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 万太郎山、宮城。 $\frac{1}{2}$ 大山、単独。 $\frac{1}{2}$ 大山、単独。 $\frac{1}{2}$ 黒川鶏冠山、単独。 $\frac{1}{2}$ 大山山麓、日向薬師より広沢寺、単独。 $\frac{1}{2}$ 大山山麓、宮城。 $\frac{1}{2}$ 御前山、単独。 $\frac{1}{2}$  $\frac{1}{2}$ 湯ノ沢峠、宮城、初雪にあう。 $\frac{1}{2}$ 大岳、単独。 $\frac{1}{2}$ 御岳高岩山、単独。 $\frac{1}{2}$ 高雄山、単独。 $\frac{1}{2}$ 鍋割山、単独。知人が頂上小舎の番人となつたので豪雨の中でかける。 $\frac{1}{2}$ 川苔山、宮城。 $\frac{1}{2}$ 高水三山、単独。 $\frac{1}{2}$ 八王子城山、単独。 $\frac{1}{2}$ 高雄山、単独。 $\frac{1}{2}$ 大山、単独。

### 会務報告 西牟田伸一

○吉沢一郎氏のK2壮途を祝う集い

場所 如水会館 南北日本間  
日時 昭和五二年四月六日

出席者 吉沢一郎、松木謙三、近藤恒雄、久保田礼治、手塚晴雄、吉沢松次郎、増山清太郎、清水達雄、鈴木英雄、中島孚、望月達夫、佐々木誠、榎本直司、岩崎利一、

宮城恭一、佐野茂雄、久保孝一郎、高野秀男、小林茂雄、甘利仁郎、中村幸正、柴崎新、中川滋夫、中島寛、倉知敬、西牟田伸一、藤本敏行、他学生2名。

今度、日本K2登山隊の総指揮としてカラコラムへ向わることになつた吉沢一郎氏の壮途を祝する為、望月会長以下が発起人となり、上記の通り壮行会が開かれた。まず吉沢さんから、今回の遠征に至る経過とその間の苦労話や色々な方々に世話になつたこと、及び計画の概要、具体的な日程等の話があつた。七月末から八月上旬にかけて登頂の予定のことである。

その後、望月会長より、『五千mの高地に二ヶ月も滞在するのは大変だ、お体を大切に』と、また甘利仁郎氏より『アンデスの時のことを思い出す。あの金集めの苦労をまたおやりになつたのかと頭が下がる』等、お祝いの言葉が続いた。吉沢さんの成功と元気な凱旋を祈りたい。

○評議委員会 六月十五日 於如水会館

出席者 望月達夫、松木謙三、手塚晴雄、

小林茂雄、三井博、原博貞、中島寛、中村雅明、西牟田伸一、藤本敏行、前神直樹、加藤正己、他学生4名

議題 一、総会にかける議事

二、会費未納分の請求について

三、学生のアフリカ遠征計画

○総会 六月二九日 於如水会館

出席者 近藤恒雄、手塚晴雄、久保田礼治、

鈴木英雄、増山清太郎、望月達夫、佐々木誠、岩崎利一、佐野茂雄、宮城恭一、久保

孝一郎、原田豊、小林茂雄、高野秀男、伊藤慈生、山崎拡、笠原広信、望月敏治、横山院一、渡辺嘉佑、甘利仁郎、中島寛、倉知敬、長沢道彦、古川晋平、中村雅明、加藤正巳、俵昭、金子晴彦、西牟田伸一、井草長雄、藤本敏行、前神直樹、加藤博行、他学生9名

議題

一、51年度決算及び52年度予算 承認

二、同 (一橋山岳部)

承認

三、評議員改選 松本謙三→吉沢松次郎

四、幹事改選

会計幹事 中村雅明→加藤博行  
五、針葉樹14号編集進捗状況報告 前神

六、51年度活動報告

七、52年度活動計画

以上の公式議題の後出席者のうち有志が次々に立つて面白い話に花が咲いた。

## —編集後記—

会報第五〇号をお届けします。

× × × × ×

編者の怠慢から発行が遅れてしまいまし  
た。その間に吉沢さんのK2隊は首尾よく  
K2の第二登に成功した模様です。学生の  
松田、佐藤両君もルウェンゾリ、ケニア山  
等を目指してアフリカに旅立ちました。現  
役諸君は夏合宿で剣と穂高の岩を大いに登  
りまくつたとのことです。会員諸兄も、そ  
れぞれに夏山を満喫されたことと思ひます。  
どしどし原稿をお寄せ下さい。

一九七七・八・二十五

藤本敏行



---

針葉樹会報 復刊第 50 号

発行日 1977年8月

発行人 針葉樹会 会長 望月達夫

編集人 藤本敏行

印刷所 大栄印刷

---